



M 2 森山 祐樹 図1 《可壊の塞》 麻紙 岩絵具 金箔 高さ3000 × 幅2080 (mm)
「風景画における具象表現と抽象表現の境界についての模索」より

《可壊の塞》

風景画における具象表現と抽象表現の境界についての模索

《The Fortress and its eventual fate》

On Searching for the Boundary between Embodiment and Abstraction in the Landscape

森山 祐樹

Yuki MORIYAMA

崇城大学大学院芸術研究科美術専攻

Division of Fine Art, Graduate School of Art, Sojo University

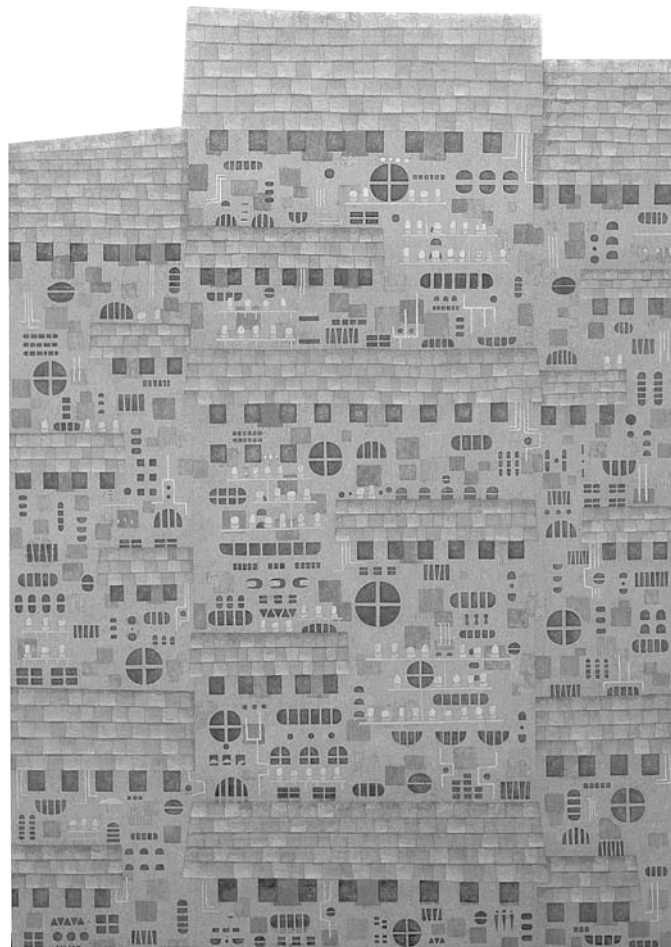


図1 《可壊の塞》 麻紙 岩絵の具 金箔
高さ3000 × 幅2080 (mm)

はじめに

－研究テーマ設定の発端－

私はこれまで風景画“的”な絵を描いてきたと思う。過去の作品を見るとそう感じるのだが、自ら統一しようとしたわけではなかった。絵を描きたいと思うときは、何かを忘れないように記録したいと思うときであった。その記録したいものとは、私が過ごす生活そのものであったり、そのなかの一時の感情や思索であったりした。具現化しにくいものを記録するために、対象である感情や思索と並行して私の中にあつた心象風景をそれらの象徴として描くことを選択した。それが街並や自然として画面に現れる。これが私の言う「風景画的な絵」である。

制作をする中で、心象風景を忠実に描き出したいと思うと共に、一つの平面として見たときに美しいと感じられるものを作りたいたいと感じるようになった。その頃から本来の心象風景を画面の上では自身のバランス感覚において心地よいと感じられる形や配置、色、質感に変換し始めた。個々の物体から性質を抜き出し、形や色そのものだけの画面構成を繰り返すうちに、描く絵は抽象的な性格を持つようになる。

対象を捉える上で最も適切である表現方法を試行する中で、それは具象表現と抽象表現の間にあるのではないかと感じるようになった。一貫したテーマを持ちながらも一つの画面の中で具象表現と抽象表現の間を往復することで、求める表現に行き着くことができるのではないかと想定し、本作における研究のテーマとした。

1 《可壊の塞》に至るまで

1-1 作品テーマの設定

この作品で捉えたかったのは、“いつか壊れるもの”であった。歳をとるにつれてできることも増えてきたが、できないことも増えてきていることに気付くことが多くなった。今回の制作に入る少し前の時期である。壊れたものは直すべきか、そのまま捨てるべきか。失った感情や記憶、感覚は取り戻そうとするべきか、忘れてしまうべきか、そういったことを日々考えながらも、答えは出なかった。壊れていくものがあることを忘れないために、私の外に記録しておきたいと思い、本作のテーマとして設定した。

1-2 題材、モチーフの設定

制作のモチーフとするのは心象風景であると述べたが、それは元々私の中で自然と生まれるものではなく、現実の世界で生活し、感じ取ったものが私の中で再構成されて心象風景となっていくものというふうで考えている。このことから、描く対象そのものではないが、それに派生する題材を外から得るために、目的とする物が無い状態でも制作に入る前の段階で様々な場所を訪れる。本制作の発端の段階において創造的な刺激を強く与えられたのは、今年の5月下旬に訪れた富山県にある黒部ダムであった。そそり立つダム壁面の不気味さや、冷たいコンクリートのつるつるした質感、山間の澄んで乾燥した空気の感触が、日常の生活の中で少しずつ浮かび上がりつつあったテーマと結びつき、作品の大まかな

イメージが固まった。

本作でモチーフとして設定した心象風景は、「人々が居住するダムとその周囲の環境」であった。そのダムはゆっくりと雨風に浸食され、崩壊する過程にある。時間の経過とともに死んでいく自分の身体と精神についての思索が、黒部ダムを訪れた際の感動と繋がり、これを元に制作を始めようと思いついた。

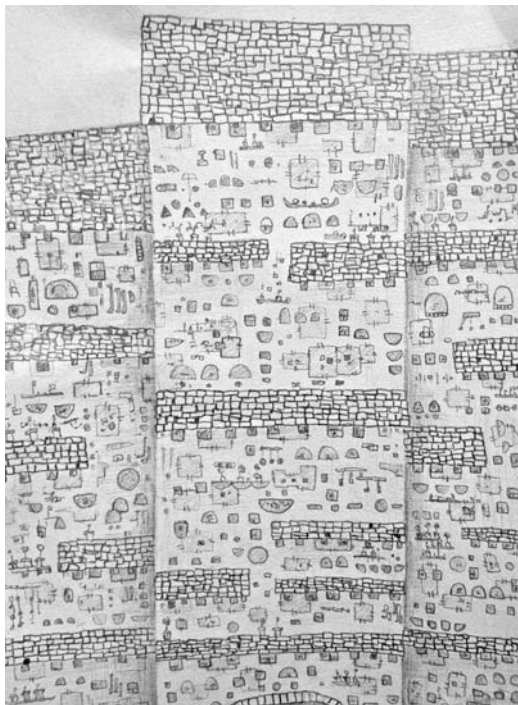


図2 小下図

1-3 これまでの制作の中で感じた問題点

過去に絵を描く上でも、無意識に対象の表現方法を具象表現と抽象表現の間に探してきたと思う。だが、求めている表現に完全に合致するような絵は描けなかった。心象風景を忠実に描くことだけに囚われ、説明的で1枚の画面として見た際に満足できず、制作自体も作業的になってしまうこと

があった。また反対に描く本来の心象風景を抽象化しすぎれば、対象を通して何を記録したいのかが不明瞭になってしまった。過程に問題があると感じ、制作が終わるまでの全ての段階において改善できる点がないか見直した。

私は絵を描く過程において、抽象化する作業に重点を置きすぎているように感じた。これまで思い描いていた心象風景は日常を過ごす中で無意識に形成されていくことが多く、本来の題材が何であるのか自らも特定できないまま制作に入っていた。何を抽象化しているのかが曖昧なまま、形や色の配置にのみ終始腐心し、絵を描き始める際に持っていた、何をどのように描き表現したいのかを見直すことなく完成に至ってしまっていると感じた。この反省を元に描きたい対象を見失わないために富山県の黒部ダム、というように題材を特定した。

2 《可壊の塞》の制作： 具象表現と抽象表現の境界で

2-1 具象化

今回モチーフに選んだ「人々が居住するダムとその周囲の環境」という心象風景は、断片的であり、朦朧としたものであった。それらを再構成する前に、画面上の対象の質を理解した上で秩序立てて配置する必要があると思った。黒部ダムを実際に訪れて感じたものを制作に転用できないか。取材をしたことによって、自分自身の身体で感じたダムの高さ、古さ、冷たさというものは、今まで心象風景の中では感じたことのない臨場感を伴った力強い感動であった。

その感動を元に、まず、実際の画面上において、次のように現実的な対象を考えた。

- ・ 白く曇った空
- ・ 重なって続く青い屋根
- ・ 日に焼け、乾いた壁面
- ・ 壁面に穿たれた窓
- ・ 生活用水を運ぶパイプ
- ・ 鉢に植わったサボテン
- ・ 破損した壁面に継ぎ接ぎされた板
- ・ ダムに溜められた水を外部に吐き出す取水口

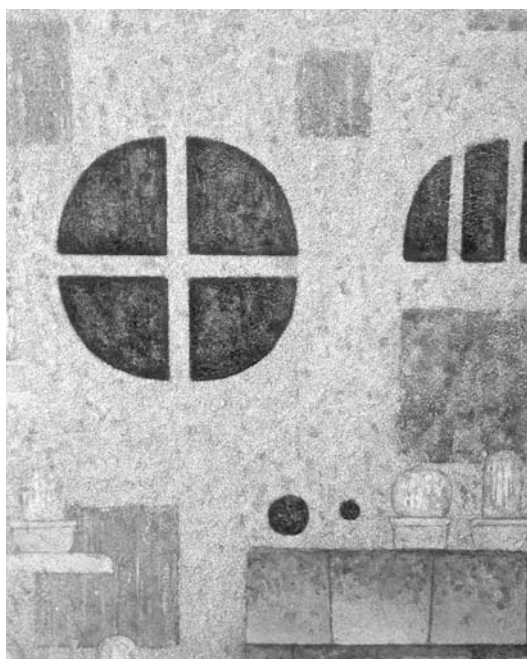


図3 制作段階の一部分

これらを、上部に空、住居に被さる屋根、壁面に窓とパイプと継ぎ接ぎの板、取水口、設置された棚板の上にサボテンの鉢を置くといったように現実にある関係性に則り、抽象化する段階においてもこの関係性は残した。

作品テーマから設定した世界観は、徐々に雨風に浸食され崩れる途上にあるもの、

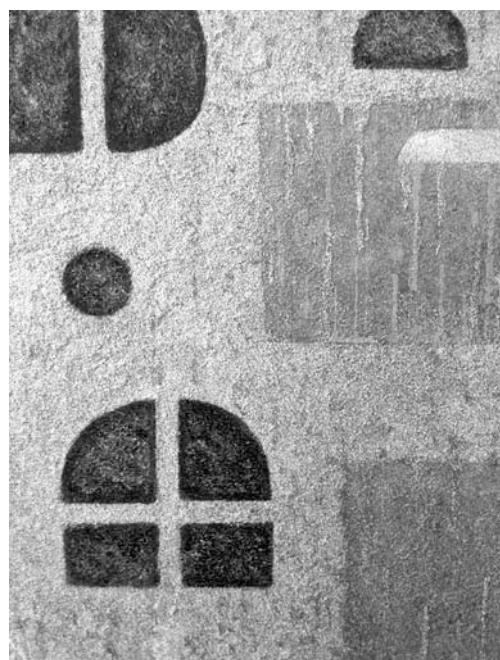


図4 制作段階の一部分

そして空気は重苦しく、建物は実体感を持ち、そして乾燥して汚れているというものであった。全体を通して世界観を一貫させ、それを感じさせる風合いを見て取れる表現をしたいと考えた。具体的に作業の中に意識的に取り入れた試行は、次のようなことだった。

- ①対象を描き進めていく過程の合間に、混色することによって彩度を落とした絵の具を画面全体に塗る。

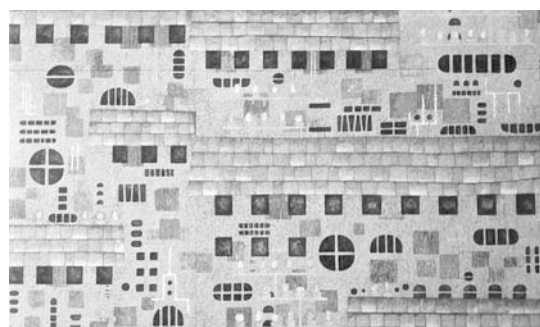


図5 制作段階の一部分

これは、全体の色調を鈍く整える、または個々の物体を一つの風景の中に溶け込ませ、細部の面同士が分断して見えないようにし、統一された風合いの画面を作るためであった。

②粒子の粗さの違う絵の具を部分によってより明確に使い分け、質感の差を出した。それは、画面を見た際に触感を想像することによって実体感を出せるのではないかと考えたからである。

③画面上部の空の部分の下地に金箔を張った。その後、白い絵の具を数回重ねた。これは朦朧とした空気を表現することによって建物との質の違いを出したかったからである。



図6 金箔を貼った画面上部

2-2 抽象化

以上曖昧なイメージであった心象風景を具象化するための過程をみてきた。ここか

らは平面構成の作業において、対象の形と配置、色に焦点を絞ってみたいと思う。

この段階において対象の質を形と配置、色に抽象化し、記録したい感情と感覚を捉えようとする。具象化する段階で表現しようとした全体の風合いを残しつつも平面構成として表現はできないかと模索した。本来の形に近付けてきた心象風景をどういった法則でもって崩し、再構成しているのかについて以下の3つの点に絞ってみたい。

・オールオーバー性について

様々な色、質感を持った形を使って平面構成をする際に画面のどこにも中心を置かない表現を選択した。陰影表現で対象を立体的に見せたり、部分を描き込んだり、量かしたりすることによって画面全体に強弱の幅が生まれることを避け、画面全体に漠然と視点を置く絵を作ろうとした。面の重なりを作りながら一つ一つの対象同士の間には距離感はずらず、目に留まる鮮やかな色を使わず、彩度の低い黄土色で全体の色調を統一した。

・具象化とのバランス

抽象的になっていく表現の中にも風景画の要素を明確に残したかった。描く対象であるダムと視点との間に空間があることを感じられるように、極端に大きい面を作らなかつた。乾燥した、重苦しいという世界観として設定した空気の風合いを残すために、平面構成的な作業の中でもそれぞれの形のシャープさが無くなってしまいかとの気掛かりがあつたが、画面全体に同系色を塗る作業は継続した。

今まで一つの面を作る際に、単一の色で

グラデーションをつけることなどはしてこなかったが今回の制作において例を挙げると、黒く切り取られた窓の淵の部分を中心部に比べてより暗く濃くすることによって面内における弱い奥行きを作る、屋根の部分が上方に比べて下方がせり出しているように見せる、壁面に継ぎ接ぎされた板面の中にも狭い明暗や彩度の差を設けるといった、全体を通して平面的に見えるように注意しながらも、それとは逆行する新しい表現の試行も行なった。

・人物を配置しない理由について

1章においてモチーフは「人々が居住するダムとその周囲の環境」であると書いたが、本作には人物を描いていない。それは、私が描きたかった絵が、ダムが壊れていく過程を包括的に捉えた象徴としての絵だったからである。人々が生活する様子を描くことで時間を特定し、一つの瞬間を切り取ったような絵になることを避けたいからである。

上記の3点を基に、具象と抽象の間の表現を模索し、本修了制作《可壊の塞》が具体的に築き上げられたと言える。

おわりに

具象表現と抽象表現の間のどこに私の求める表現はあるのか、今回制作を通して模索する中で、両極の間の中にある一つの幅の中で変動していくものだと考えた。それはモチーフ、題材、または絵を描くその時期の自分自身によって感覚は変わり、それによって最も対象を適切に捉える表現も変わっていくものであると感じた。環境や自

分自身の変化に柔軟に対応して、それを観察し感じ取ることが重要だと考える。制作を続ける上で、これらの反省点を手掛かりにして、さらに具象と抽象の間の表現方法を模索していきたい。